2025 年「国際ジェンダー学会研究活動奨励賞」研究活動報告書

１．提出日：

2026 年 5 月 26 日

２．提出者氏名：

欧陽珊珊

３．申請した研究テーマ：

「障害者女性におけるセクシュアリティの探求と関係変容に関する考察――日台の当事者の経験を中心に」

4. 研究活動報告

本研究の目的は、障害者女性におけるセクシュアリティの探求過程や、それに従う人間関係（家族関係や親密関係など）の変容を考察するものである。障害女性であり、セクシュアル・マイノリティでもある当事者の経験を通じて、障害、ジェンダー、セクシュアリティの交差によって生じる複雑な状況や、異なる社会環境が与える影響を明らかにし、より包括的な理解の促進と支援の拡充に寄与することを目指している。

障害者女性の性（セックス、ジェンダー、セクシュアリティを含む）に関する研究は、特にセクシュアル・マイノリティの視点を組み込んだものが非常に限られている。既存の研究の多くは異性愛者としての生活経験や、より広い社会的な性別に関連する問題に焦点を当てている（cf.土屋 2023; 中華民國身心障礙聯盟 2023)。 障害があり、かつレズビアンやバイセクシュアルである女性は、多重に不可視化をもたらし、声を上げることに対して複層的な困難を伴うことが多い。LGBT+ people with disabilities の経験に関する研究や物語の記述は、1990 年代半ば以降欧米を中心に増加している。その中には、障害者であり、レズビアンやバイセクシュアルを自認する当事者が、同性愛嫌悪のために障害コミュニティに馴染めず、レズビアンとバイセクシュアルのコミュニティ内でも自らの居場所を見つけることが困難であると述べている研究がある（Vaughn et al., 2015)。しかし、これらの先行研究は主に欧米社会における経験を扱っており、アジアにおける障害、 ジェンダー、セクシュアリティの交差に関する議論はまだ少ない。筆者のこれまでの研究では、台湾の当事者 （台湾では 「身障同志」と呼ばれる）の生活経験や社会運動への参加に注目してきた（欧陽 2021;2023;2024)。しかし、台湾でも男性の身障同志と比較して、女性や非二限的性別の身障同志による社会運動への参加は著しく少ない状況である。本調査は障害者女性に関する研究が進んでおり、性的マイノリティ運動と障害者運動の分野間で交流も行われている日本と台湾に焦点を当て、これまで看過されできた障害者の 「性の多様性」 の課題に個々のマイノリティの女性の経験を提示することである。

研究協力者は、台湾においてはバイセクシャルであり肢体障害のある Julia さん、日本においてはレズビアンであり肢体障害のある K さんと W さんの計 3 名である。いずれも 30 代であり、対面でのインタビュー調査を実施するとともに、プライド・パレードにも同行した。

調査の結果、3 人のライフストリーからは、既存研究で指摘されてきた複合的な抑圧や困難を経験していることが確認された。例えば、学校において障害者であることを理由に差別を受けた経験や、恋愛や性について語る環境が乏しい中で、周囲から無性愛的な存在としてみなされてきた経験が語られた。

周囲から無性愛とみなされていることもある。一方で，台湾の Julia はバイセクシュアルであることを契機として，性的マイノリティのコミュニティのつながりが形成していた。「手天使」や「同志ホットライン」といった台湾の障害者と性的マイノリティを支援する団体との関わりと通じて、性的主体性や政治性を積極的に探求し，既存なセクシュアリティの規範に抵抗する実践へと結びついていたことを明らかとなった。また、こうした変容の過程において、「ケアを受ける側」とみなされていた Julia は、活動への参加を通して「ケアをする側」としての役割も担うようになり、家族との関係性にも変化が生じていたことが示された。他方、日本の K さんと W さんからは障害者コミュニティの中で非異性愛的な欲望について語る機会がほとんど存在しないこと、またセクシュアリティ問題自体が軽視されがちであることが語られた。さらに、性的マイノリティのコミュニティや関連するイベントに参加する際には、車いすユーザーにとって物理的アクセシビリティの不足に直面する場合が多いことも指摘された。

台湾の Julia の経験からは、セクシュアリティの多様性と交差性を重視するコミュニティ文化が，障害女性のライフコースやアイデンティティの形成，さらにはケア関係の変容に対して、豊かで意義深い影響を及ぼすことが明らかとなった。また、多様な性を生きる障害者の語りや経験に耳を傾け、その主体的実践を重視する視点の必要性も示唆された。これらの知見は、日本における今後のコミュニティと支援のあり方を考える上でも重要な示唆を与えるものである。

なお、本研究テーマに関連する調査は、2026 年度上野千鶴子基金および上廣倫理財団の研究助成を受けて継続している。また、本研究成果の一部は、以下の論文として公表している。
欧陽珊珊，2025,「障害女性におけるセクシュアリティの探求とケア関係の変容――ある台湾の肢体障害でバイセクシュアル女性の経験を中心に」『国際ジェンダー学会誌』23：82-101.

参考文献

土屋葉編（2023）『障害があり女性であること――生活史からみる生きづらさ』現代書館.
中華民國身心障礙聯盟（2023）『身心障害女性感情と家庭選択経験専題報告』.
Vaughn, M., McEntee, B., Schoen, B., & M, McGrady. (2015) “Addressing Disability Stigma. within the Lesbian Community” Journal of Rehabilitation, 81(4):49-56.
欧陽珊珊（2021） 「障害とセクシュアリティの交差についての考察――台湾の肢体障害／男性同性愛者の経験から」『コア・エシックス』17:51-63.
――――（2023） 「第５章：残酷児――台湾における障害のある性的少数者の実践」菊地夏野・堀江有里・飯野由里子編『クィア・スタディーズをひらく３』晃洋書房，108-135.
――――（2024） 「カミングアウトをめぐる可変的な交渉過程――ある障害をもつ男性同性愛者の経験を事例に」『Gender and Sexuality』19：47-68.